

巻頭発言

フロンランナー ～新しいことを始めることの意義～

立命館大学 総合科学技術研究機構 教授 たてやま かずよし 建山 和由



昨年、立命館大学に重機部ができました。建設機械に興味のある学生が集まるサークルです。おそらく他大学にはないユニークなサークル活動だと思います。部長は経営学部の3回生の女子学生です。彼女は子供の頃から重機が好きで好きでたまらないという人です。大学に入って、周りの学生にそのことを話すと同じような学生がいて、現在は10名以上の部員が集まっています。

各地で行われている建設イベントで重機が展示されていると、子供たちは列をなして運転席に座ってご満悦になっています。その様子を見ると、潜在的に重機が好きという人は多いのだろうと想像しています。

ただし、このサークルは、重機が好きと言うだけで集まった組織なので、一般的なスポーツクラブのように日々練習して、他校と試合をするようなお定まりの活動内容があるわけではなく、「何をしようか」ということから議論しなければなりません。

まずは、免許を取ろうということになり、そのための勉強を始めるとともに、学園祭では、レンタル会社や重機メーカーにお願いして、小型の重機を貸し出してもらい、重機に関するパネルも用意して重機の魅力を来訪者に紹介する取り組みを始めています。本年2月には、重機を使用して工事を行っている愛媛県の建設会社にインターン

シップに行きましたが、その会社が愛媛大学とつながりがあることが分かったと、愛媛大学の学生に重機部を作らないかと働きかけていました。

建設機械というと、これまで知識と関心はほぼ建設関係者に限られていましたが、重機部の活動を通じて一般にも広がり、建設機械に関するこれまでにない新たな展開が生まれてくるかもしれないと、大いに期待しています。

ここで気付かされたことは、他の誰もやっていないことを進める際は、自分の発想や考えで進めることができるということです。あたかも白い紙に頭に浮かんだ絵を描くように、自由に進めることができます。それに追随する人は、先行者の取り組みを見ながら事を進めることができ、失敗を避け得るメリットはありますが、先行者の路線を無視して進めることはできないでしょう。この意味から、これまでにない、他にはないことを始めるということは、無限の可能性を持っているといえます。

建設改革が大きく動き出している昨今、定型的な新技術だけではさらなる発展を期待することができず、現状を大きく変える斬新な技術や取り組みが求められています。これまでにない全く新しい発想に基づくユニークな技術や取り組みがどんどん試行され、建設の可能性を大きく広げてくれることを期待しています。